

4) ハシバミ＝榛

ハシバミはカバノキ科の落葉低木で、北海道から九州にいたる陽当たりのよい山野に自生し、高さは3～5mに達する。葉は円形に近く基部はハート型で先端が尖る。葉脈ははっきりと入り若芽には紫色の斑がある。雌雄異花で3～4月ごろ雄花はカバノキ科の特徴である茶褐色の尾状花序となり、雌花は小さく数花が集まって咲く。果実は丸いドングリ状で、径1.5cmほどである。和名の由来は葉の葉脈がへこみ皺のあるように見えるところからハシワミ(葉皺)、果実が食用になるところからハリシバミ(榛柴実)の意とか諸説がある。別称としてはカシバミ、シバグリ、カシマメなどがある。学名は『*Corylus heterophylla*』で属名は種子の形状からヘルメットを意味し、種小辞は「異葉性の」という意味である。イギリスでは『Japanese hazel』、フランスでは『noisetier』、中国では『榛』である。

ヨーロッパではハシバミは食用として栽培されており、ヘーゼルナッツ(hazel nut)の名前で親しまれてきた。種皮を剥き、煎ってから食べるほか、菓子の材料にされ、クッキーやチョコレート、アイスクリームなどに入れられることが多い。イタリアのチョコレート菓子『ジャンドゥーヤ』はその代表である。種子には蛋白質や脂肪を多く含んでおり、フランスなどではハシバミ油は料理の材料として広く用いられており、材はトネリコと同様に固くて曲げやすいために、東洋のように竹のなかったヨーロッパでは、枝を鞭の素材にしてきた。

ハシバミが日本の文献に初めて登場するのは、『本草和名』で、その後、源順の『倭名類聚抄』には、「和名波之波美」と記されている。しかしハシバミのもっとも重要な点は古来より油料として用いられていたことである。4世紀頃の神功皇后の時代、摂津住吉の遠里小野(オリオノ)村ではハシバミの果実から油を採って、神前の灯明など神事の用に供したと伝えられている。当時はまだアブラナやハゼなどの油料植物は少なく、ハシバミはそのために大切にされていたのだろう。

中国でもハシバミは重要な食料だったと見えて、紀元前3世紀頃の『周礼』には、「榛、栗に似て小なり」と記され、『礼記』にもその名が見える。また『詩経』には、「山には榛(シ=ハシバミ)有り、隰(シ=湿地の意味)には苓(リョウ=甘草)有り」と記されており、栗や漆などとともに、栽培されていたことも記されている。

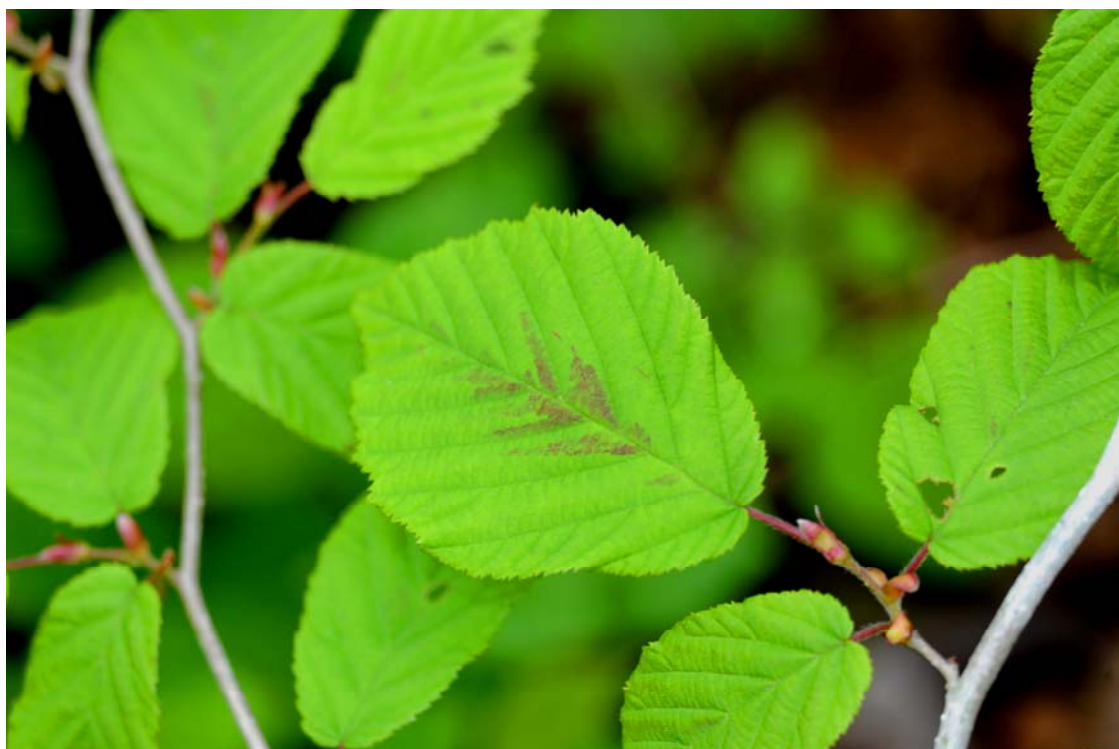
ギリシャ神話では幸運と富裕の神ヘルメスがアポロからハシバミの杖を授かり、これで人々の心や身体を癒したと伝えられている。このため医学のシンボルは、この魔法の杖と2匹のヘビになっている。またハシバミの杖には魔力があると考えられるようになり、中世ヨーロッパではY字型に切ったハシバミの枝で鉦脈や水脈を発見する占いに用いられるようになった。この考えはさらに拡大されて、泥棒や逃げ出した家畜を探すにもハシバミの棒が用いられるようになった。これはトネリコにも似ているが、ハシバミはグリム童話にも登場している。



ハシバミの雄花穂。カバノキ科独特の尾状花序である(長野県軽井沢町)。



ハシバミの2本の雄花穂(紐状の花)と、左側の赤みがかった雌花(○内)が見える(軽井沢町)。



ハシバミの若葉にはこのような紫色の斑が出るが、芽だしの時期が終わる6月頃には次第に消滅して行く(2012年6月11日長野県軽井沢町にて撮影)。



ツノハシバミの若い果実。指に見えるが、やがて基部が丸く膨らんでくる(長野県軽井沢町)。



ツノハシバミの熟した果実、こんな形状に育ち種子を実らせる。2013.08.26.撮影。 [目次に戻る](#)